

特集

千住キャンパス 開設

音楽の未来——地域と文化、研究と教育をめぐって

東京足立区にオープンした千住キャンパスせんじゅには、音楽学部音楽環境創造科が茨城県取手キャンパスから移転した。また大学院では、音楽研究科の音楽学専攻を拡大再編した音楽文化学専攻が、千住キャンパスを活動拠点のひとつと位置づけて研究活動を行うことになっている。千住キャンパスは、「音楽・文化・学」の新たな動向に対応するとともに、地域とのかかわりを重視した音楽研究・音楽教育の新たな拠点として、学内からも学外からも大きな期待を寄せられている。



〔座談会〕

大角欣矢

助教授—音楽学部楽理科

佐野靖

教授—大学院音楽研究科音楽文化学（音楽教育）

畑瞬一郎

教授—大学院音楽研究科音楽文化学（応用音楽学）

熊倉純子

助教授—音楽学部音楽環境創造科



音楽学の現在と課題

畑 ここ数年芸大は大きく変化しつつあります。音楽学部においても音楽環境創造科の設置、また大学院の再編にともなう音楽文化学専攻の開設といった新しい動きがあります。そのような流れのなかで、この秋、足立区の協力を得て千住キャンパスが作られることになりました。これらは、大きな傾向として音楽学という伝統的な学問の周辺領域が拡大し、充実してきていることとパラレルな関係にあると考えることもできるでしょう。そこですまはじめに、二十世紀末から二十一世紀にかけて、音楽学の視野や射程が広がってきているということに関して大角先生の考えを聞かせていただき、続けて音楽教育の佐野先生、音楽環境創造科の熊倉先生のお二人から、千住キャンパスと教育研究活動の動向について、ご意見をうかがいたいと思います。

大角 近代的な音楽学はヨーロッパ、なかでもドイツを中心に十九世紀に成立した学問です。それから一世紀半ないし二世紀が経過した今、その内容は明らかに変質してきています。

従来、音楽学研究の中心を占めてきたのは楽譜の分析で、音楽作品を理解するために、楽譜を分析してその構造を明らかにするというところに、二十世紀半ばぐらいまで大きなエネルギーを費やしてきました。そういう積み重ねの上に現在の音楽学があるわけですが、二十世紀が終わりに近づくとつれ、そういうやり方では音楽をめぐる理解には限界があるのでないかという反省がさまざまな場面で出てきたわけです。

つまり、楽譜を主な媒介として伝えられる音楽というのは、地球上のごく狭い範囲の、それも狭い時代のある特定の社会層を中心にやりとりされる音楽であった、その外側には非常に広大な、楽譜を必ずしも必要

としない音楽の領域が広がっているという認識が強まってきました。また、たとえ楽譜に表せる音楽であっても、楽譜の構造を分析するだけでは音楽がわかったことにならないのではないかと反省があり、その人が置かれている社会的な状況や、身体の音と関わる側面がどのように形成されてきたか、音の響きがその人の属する文化的なコンテキストのなかでどういう意味を生産しつつあるかといったダイナミックな音と人間の向き合いに、もつと目を向けなければいけないのではないかと今考えられています。

こういう時代に芸大大学院に音楽文化学専攻ができ、複数の研究分野が緊密に連携していこうという動きが生まれていることは、音楽学にとってもまさに願ってもない方向性ではないかと思っています。音楽学の新しい展開にとっても非常にポジティブなチャンスが、今与えられているのではないかと期待しています。

佐野 人間と音楽のかかわりを教育的な視点から研究したり実践したりすることを、広く音楽教育と捉えています。音楽教育や音楽教育学といった用語は、いわゆる学校音楽を意味する「音楽科教育」よりももつと広く、根本的には人間にとつて音楽がどういう意味を持つかという問いを内包しており、そういう面では音楽学とも共通の根っこを持つものだと思います。芸大には、学部ではなく、大学院にしか音楽教育の講座はないのですけれども、学生たちの研究や実践の対象は、学校の音楽に限られません。むしろ音楽の専門教育から幼児の教育、成人あるいはシルバーク世代の教育、生涯学習を視野に入れた社会教育的な側面、それから音楽療法も含めた福祉的な面でのアプローチなど、いろいろな研究・実践の対象を持っています。

大学院レベルでの研究の可能性という点では、今回足立区というフィールドを得て、教育現場と協力しつつ地に足のついた実践研究ができるのではないかと期



大角 欣矢

(おおすみ・きんや)

助教授——音楽学部楽理科

1960年兵庫県生まれ。83年東京芸術大学音楽学部楽理科卒業、86年同大学院音楽研究科修士課程修了、91年同博士後期課程単位取得満期退学。東京芸術大学音楽学部助手、講師、鳴門教育大学助教授を経て2000年4月から現職。

待しています。千住キャンパスが、足立区を中心とした社会教育の発信拠点として、また音楽文化学としての音楽教育研究のフィールドになる可能性があると思っています。

もうひとつアウトリーチ的な活動として、演奏系の学生及び卒業生たちが演奏活動や創作活動を通して、足立区との教育機関や地域と交流することも広い意味での音楽教育であると考えています。(注 アウトリーチ Public Outreach…芸術活動や教育研究を行う組織が一般社会に向けて教育普及・啓発活動などの働きかけを行うこと)

熊倉 音楽環境創造科の教育は多岐にわたっています。そのうちのひとつである音響エンジニアリングという部分に関して、これまで取手キャンパスには充実した環境がありませんでした。したがって千住キャンパスに作られる録音スタジオで、さまざまな外部の専門機関と連携をしながら、より高度な実験を行ったりしていくことが、より自在に展開できるようにするという点で大きく期待できるでしょう。

ただ録音技術者やトーンマイスターがいてもそれだけでは録音はできません。作品がないといけないし、演奏家がいけないといけないし、そういう意味で上野キャンパスで活動している演奏家の皆さん、あるいは曲をつくってくださる方々も千住に来て居場所を持てる

ことで、拠点として機能できるようになればと思つて
いるところ。【注】トーンマイスター (Tonmeister) : 「音
の匠」として録音のあらゆる側面をコントロールする専門家。ドイツでは
国家資格として高く評価されている。

また、学科のもうひとつの柱であるアートマネジメ
ントにおいては、「教室の中だけで勉強していても、
料理をつくらずに料理のつくり方だけ勉強しているよ
うなものだ」といわれます。学外に実践の場を持つこ
とはわれわれにとつて非常に重要で、これまでも取手
市や市民の方々にお世話になり実地で学ばせていただ
いておりますし、文化振興の計画にもかかわらせてい
ただき非常に勉強になりました。足立区でも千住校地
だけではなくて、地域そのものがキャンパスだと考え
て何か活動できるのではないかと思つています。

やはり全体を見ないと芸術振興の計画はできないの
で、特に私の専門分野から言いますと、音楽や芸術の
外側の世界が音楽や芸術をどう捉えていて、何を期待
しているのが非常に重要な関心事になってきます。
ですから、地域の期待はわれわれにとつて責任が重い
ことではあるのですけれども、きつといい勉強ができ
るだろうなと思つています。

また、これからは演奏家も研究者も、社会全般の流
れや、社会が芸術や音楽に何を期待しているのか、ど



佐野 靖

(みの・やすし)

教授——大学院音楽研究科音楽文化学
(音楽教育)

1957年徳島県生まれ。81年東京芸術大
学音楽学部楽理科卒業、85年同大学院
音楽研究科修士課程(音楽教育)修了、
86年同博士後期課程中途退学。東京学
芸大学助手を経て、88年東京芸術大学
音楽学部講師、90年同助教授、2006年4
月から現職。同年1月から東京芸術大学
音楽学部副学部長。

ういうふうな位置づけられているのかを、専門家とし
て活動していくうえの教養として学んでおいたほうが
いいかなと思つていますので、ぜひわれわれの社会環
境に関する授業に、上野キャンパスの学生にも積極的
に参加してもらいたいと期待をしています。

異質なものが出会い、 新しいものが生まれる

畑 おっしゃるように、音楽を中心とした多様な芸術
活動を生みだし、育てていくには、それらの土壌とな
る社会についても考えていかなければならないという
のが、二十一世紀に向けた音楽学部の新しい視点であ
り、これがとても重要であることはあらためて強調し
ておいてよいでしょう。

その意味で、これまで上野キャンパスで養成してき
たいわゆる音楽家が、その素晴らしい演奏を千住キャ
ンパスの専門的なスタジオで高品位な録音作品にして
いくという活動が期待されるのはもちろんのこと、社
会に関心を向けた千住キャンパスの研究教育の成果や
リソースを上野に持つてくることによって、これから
音楽家として巣立っていく学生たちが社会的な要素や
技術的な要素にも目を向けるようになっていくのが理
想ですね。両方の作用があつてこそ、お互いにいい刺
激を与え合う環境ができるのではないかと思つています。

佐野 地域との連携では、今年秋の文化の日を中心
に、足立区の子どもたち、あるいは音楽好きの区民たちと
芸大生と一緒に演奏したりしながら、交流を深めてい
けるようなコンサートを企画しています。また学校現
場との連携では、部活の合唱やブラスの指導、あるいは
鑑賞教室のようなものを提供することができるでし
ょうし、さらには大学院生を中心に、授業実践に寄与
できる方策も探つていきたいと考えています。いずれ
にせよ、こちらから提供するばかりではなくて、地域

や学校と互いに学び合うという、往復運動やコラボレ
ーションを大事にしたいと思つています。

すでに足立ジュニア吹奏楽団の皆さんに協力をお願
いし、子どもたちの音楽的能力を高める実験的な指導
を実施しています。こうした継続的な取り組みから導
き出された基礎データをもとに、器楽演奏における音
楽の基礎指導はどうあるべきか、また子どもたちの基
礎的な音楽能力をどうやって高めるかといったノウハ
ウを、これから体系的にまとめていきたいと思つてい
ます。

畑 子どもと大人、伝統と革新、技術と感性など、異
質なものが出合うことによつて、伝統がさらに鍛えら
れ、あるいは新しいものが生まれてくる、それこそが
いわゆる切磋琢磨というものでしょうが、本質的な創
造とは、このような異質な要素が出会う環境から生み
出されるものだと思います。

もういちど音楽学に話を戻したいのですが、これま
で音楽学というのは、西洋のクラシック音楽、たとえ
ばモーツァルトやベートーヴェンといったイメージで
語られてきたと思つています。しかし、例えば音楽民族学
の領域などでは、必ずしも西洋クラシック音楽で通用
する概念だけではカバーできない部分にもすでに目を
向けてきていますね。そういった視線をさらに延長し
ていくと、ポピュラー音楽の研究など、研究の裾野は
随分広がつてきていると思つています。その意味で、こ
れまでの西洋クラシック音楽研究の知識や前提条件が
当たり前とはならないさまざまな領域において新しい
知の出会いがあるということは、音楽学にとつても大
変刺激的な状況なのであり、そのような広い領域で縦
横無尽に考察を行つていく、そして、これまで結びつ
けられてこなかった要素を結びつけていくことが音楽
文化学という新しい枠組みに課せられた仕事なのだと思
います。

「橋渡し」という営み

大角 従来の音楽学の世界では、われわれの社会生活からかけ離れたところで、「人類にとって音楽とは何か」といった、すごく高尚な問いを掲げて抽象的な議論を繰り返してきたむきもあります。そういう社会から遊離した研究にもとづいて進んでいくと、どこにいるのかもわからない人類を想定して、「あなたが音楽だと思っているものはまちがっている」とか「あなたの音楽理解はまちがっている」という主張を押しつけることになりかねないわけですね。

具体的でローカルなコンテキストのなかで、その人たちにとって音楽はどういう役割を果たして、どういう意味を持っているのかと問わなければ、われわれがやっていることは全然社会に還元されていかないのではないのでしょうか。アカデミズムの外に出て、あるいはアカデミズムの内と外を往復して、実際に生きて生活しつつ、文化活動に携わっている人たちと一緒に、ともに音楽をつくり、ともに実践しコラボレーションをしていく。まさにそこで生涯教育ということにもわれわれはどんどん携わっていくべきだろうと思います。また、ローカルなコンテキストのなかでの研究や文化活動だけではなく、二十一世紀はグローバル化の時代と言われているように、地球のいろいろなところと瞬時につながっているわけです。われわれが音楽学といったときにいつも想定してきた西洋クラシック音楽の伝統的な枠組みから抜け落ちてきた、世界各地の音楽、あるいはポピュラー音楽といったグローバルなコンテキストと、例えば足立区という具体的な地域文化のコンテキストが結びつく一種のアクセスポイント、結節点として、芸大がどういう活動をしていくべきなのか、今まさに問われているのではないのでしょうか。熊倉 社会と芸術をつないでいくうえで、「橋渡し」

という言葉をよく使いますが、芸術が領域化されて専門施設のなかに閉じこめられてきた結果、両者の溝は思ったより広がってしまったのではないのでしょうか。すると「橋を渡す」ときに橋桁が一本では無理で何本も必要になってくると思うんですが、音楽環境創造科の研究教育活動は、どちらかと言うと社会の側から音楽を見て一本の橋桁になるということかと思えます。でも、それだけですと、非常に産業化されつつある音楽ばかり聴くことになるかもしれません。ですから一方で抽象的で高邁なことを考える橋桁も必要だと思えます。その両方があつて初めて橋が架かるのではないかと思うんです。

小さな感動の積み重ねから

佐野 全国の教育現場で子どもと音・音楽の出会いをみてきた経験から言えば、たとえ小さなものでも、子どもたちにとってビビッドな感動がとても重要だと思います。そうしたアクチュアルな瞬間的な音・音楽との出会いが大切で、そういうものを積み重ねていきたい。

また、表現者にとつても、目の前で子どもたちの表情がどう変わるかといった体験、大ホールでは味わえないような生の交流はかけがえのない貴重なものとなると思うし、新しいフィールドができたところで、そうした場を少しでも広げていければと思います。

畑 そうですね。音楽には人間の精神の根本的なところに働きかける力があると思います。ところが、これまでは「芸術」という言葉、その崇高な概念を大切にすることがゆえ、ややもすれば象牙の塔のようなものとなつてしまい、もつと直接にアピールできたであろう仕事をしなかつたのではないか、という反省の気持ちもどこかにあります。

芸大のような組織が、ほんとうに地道に、毎日の小



畑 瞬一郎

(はた・しゅんいちろう)
教授——大学院音楽研究科音楽文化学(応用音楽学)
1963年愛知県生まれ。87年東京大学文学部言語学科卒業、89年同文学部伊語伊文学科卒業、94年同大学院人文科学研究科伊語伊文学専攻修了(文学博士)。94年東京芸術大学音楽学部講師、98年同助教授を経て、2005年4月から現職。2004年4月から東京芸術大学音楽学部副学部長、言語音声トレーニングセンター長。

さな感動をつくり続けることによって、何か小さな変化が具体的に起こってくるのではないかと期待しています。教育現場などで「音楽ってすごいね。もう一度見直してみよう」ということになっていけば、いずれは国家レベルの文化政策にも十分に反映されていくだろう。十年どころか五十年、百年という期間で考えなければならぬ話であるかもしれないけれども、そういった小さな具体的な仕事にこれから踏み出していきたい。いつ始めても手遅れではないと信じながら、着実に進んでいくべきなのではないでしょうか。

熊倉 私も、これまで百二十年の歴史のなかで芸術家を輩出してきた芸大だからこそ、まさに二十一世紀の新たな現場を創出することができるとも思います。一方で、現実にはそのような小さなローカルの、目の前の社会の人々に向き合おうとする芸術家が必ずしも多くないということは、現場において非常に残念なことなんです。企画を立案するときにも、もつと芸術家のほうからアイデアが出たほうが、芸術家ではない人間がプログラムを組み立てるより面白いんですよ。

また、芸術家を輩出してきた芸大が文化政策に関わることも大きな意味があると思います。理屈や調査だけではなく、芸術的実践から文化振興を考えるこ



熊倉 純子

(くまくら・すみこ)

助教授——音楽学部音楽環境創造科
1958年愛知県生まれ。82年慶應義塾大
学文学部文学科仏文学専攻卒業、84年
同文学部哲学科美学美術史学専攻卒業、
91年同大学院文学研究科哲学専攻美学
・美術史学修士課程修了。(社)企業
メセナ協議会勤務を経て、2002年4月か
ら現職。

とは非常に重要なのではないでしょうか。芸大がひとつの核となり、市民と行政が一緒になって、足立ならではの文化的アクションを考えていくきっかけになっ
てほしいと思うのです。

畑 たしかに地域との連携ということでは、一方の側
からだけの思いこみで動いていては、たとえそれが善
意のものであっても必ずしも成功へと導くことはでき
ませんね。例えば福祉施設での音楽療法といった活動
も考えられるでしょうが、場合によっては、もつとく
だけた形で高齢者施設に音楽を届けに行くということ
があってもいいかもしれません。コンサートを企画す
るにしても、その地域ですで行われている文化事業
と相乗効果を生むような形で行えるのが理想でしょう。
あらゆる活動において「受け手」というものを明確に
意識して動くことが大切であり、そのような形をとり
ながら地域住民の方たちに納得して喜んでもらえる事
業を展開していかなければならないと思います。

幸いなことに芸大には豊富な人的リソースがありま
す。考えようによっては、人材を提供する、あるいは
時間を提供するというのが、芸大音楽学部のいちばん
大切なテーマだと言ってよいのかもしれない。音楽
は時間芸術ですから時間を提供する、時間を提供する

ための人を提供するというのですからね。本当の意
味でビビッドに芸術を経験するというのは、人と人と
が同じ時間を共有するということと同義です。そのこ
とを理解している音楽家は、学生を含めて、けっして
少なくないのではないかと思います。

生きた音楽体験のために

佐野 芸大生というと、みんながヨーロッパへ留学し
て、クラシックの演奏家になろうと思っていると想像
しがちですが、今の学生たちは自分の方向性について
も、音楽そのものについても興味・関心が多様なんで
す。そのなかで、地域社会とかかわっているいろいろな
ことを実現しようと思っている学生や演奏家はたくさん
います。ただ、そういう人たちが望んでも、それを実
現できる場が少なかったと思います。そのあたりをわ
れわれが、こんなのがありますよとまく広報し、潜
在的には関わりたいと思っている学生の意識を引き出
す必要があるのではないのでしょうか。

大角 近代の芸術家は制度化した、閉鎖的なシステム
の中に閉じ込められ、社会との生きた交流がなくなっ
てしまったようなところがあって、それは芸術家の側
にある、音楽ホール、劇場、美術館といった非日常の
場として作り上げられた環境に登場しないと自分は芸
術をやっていることにはならないんだ、
という思い込みにもつながっています。だけど本来、
それだけが芸術のあり方ではないと思うんです。

ドイツ南西部のテュービンゲンという人口七万人の
小さな大学町に住んでいたことがあるのですけれども、
たいへん文化的な町であるにもかかわらず、そこには
ちゃんとした音楽ホールがひとつもないんです。ドイ
ツでは夜八時頃から演奏会がありまして、職場から帰
って家で一息つき、近くの教会や公民館のような場所
で音楽を聴いて戻ってくるわけです。そういう場では、

音響はよくないし、演奏も超一流というわけではない
ですけれども、日常生活のなかでの生きた音楽の体験
があって、感動する経験が生活のなかにあるんですよ
ね。

ヨーロッパを理想化するつもりはないですけども、
いわば浴衣姿で風呂上がりに行ける、そういう気軽な
音楽との出会いの場はもつと必要ですね。われわれの
側も意識改革していくような、一種の起爆剤なもの
になればいいかなと思っているんですけども。

熊倉 従来の芸術家、あるいは芸術家観みたいなもの
の本質をもういちど確かめながらも、なくなってもら
っては困ると私は思っているのです。ただ自分の能力
を発揮できる場が、すぐれた音楽ホールだとか、コン
クールで賞を取ることだけでは足りないはずなのです。千
住キャンパスを、若い芸術家の卵たちが、日常的に、
フランクかつ真剣な論議をするような場にしたいと思
っています。

畑 ここでさまざまに指摘された問題は今後の音楽学
部の歩みを方向づけていく大きな課題だと言えますね。
学生を見ていても、いわゆる伝統的な音楽学部のイメ
ージを超えようとする学生が日増しに多くなっている
ように感じます。そういう意味で、あくまでも表面
的・象徴的な分類ですが、伝統的な楽理科と先端的な
音楽環境創造科という二つの学科を卒業した後に、学
生たちが相互にクロスしあう土壌は、すでにでき始め
ていると言えるでしょう。現実にはダイナミックな相
互作用はすでに始まっていて、それをさらに大きな動
きにしていくことが、千住キャンパスに求められてい
ると思います。

新たに誕生した千住キャンパスが、これからの音楽
学部にとって、広義の研究教育環境の充実という意味
できわめて大きな意味を持っていることはまちがいあ
りません。

千住キャンパスの概要

亀川 徹

千住キャンパスは、足立区からの大学誘致を受けて、旧千寿小学校跡地（足立区千住一丁目二十五番一号）に東京芸術大学音楽学部の分校を設置する形でオープンします。旧千寿小学校校舎の土台、柱、梁といった既存の構造をすべて生かしながら再利用するスーパリーフォームという画期的な工法で建てられた研究教育棟に加え、大学の名に恥じない本格的な音楽音響研究を行うためのスタジオ関連新棟を備えたキャンパスとなります。上野、取手、横浜に続いて芸大の四つ目のキャンパスとして、コンパクトでありながら充実した施設となっています。

一昨年の五月に足立区との話し合いが始まり、その後、施設の計画や建物の設計を半年あまりで仕上げるという苛酷な挑戦に協力してくれたすべての関係者のみなさんの気持ち、美しく結実した建物だといって過言ではありません。

キャンパスの周辺には、さまざまな文化施設もそろっており、そのような環境を生かしながら千住キャンパスの機能を十全に発揮させていけば、千住の街に文化芸術の新しい動きを生み出していくことができるでしょう。

*

教育研究組織として千住キャンパスに設

置されるのは、まず第一に音楽学部の「音楽環境創造科」ということとなります。二十一世紀の新たな音楽芸術と、それにふさわしい音楽環境・文化環境の発展と創造に資する人材育成をめざす音楽環境創造科は、平成十四年の当初から茨城県の取手キャンパスにて活動を行ってきましたが、新設から四年を経て、ようやく充実した自前の施設を手に入れたこととなります。当然、学生や教員の期待は大きく膨らんでいます。また、千住キャンパスでは大学院の研究活動も活発に行われる予定になっています。この四月には大学院音楽研究科の修士課程に「音楽文化学」という専攻が新設されました。これは音楽という営為を広い視野から研究するための組織で、音楽学、音楽教育、ソルフェージュ、応用音楽学、音楽文芸、音楽音響創造、芸術環境創造といった七つの研究分野から構成されています。この「音楽文化学」専攻に属する教員が、上野キャンパスと千住キャンパスを往き来し、伝統と革新を横断しつつ高度な研究活動を進めていきます。

※平成二十年には大学院博士後期課程「音楽文化学専攻」も開設される予定となっています。

◆スタジオA、スタジオB、録音調整室

新館の三階に位置する床面積約一六〇㎡



スタジオA。新館3階にある大規模な録音スタジオ



スタジオB。中規模スタジオ（新館3階）



第7ホール外観

の大規模な録音スタジオ（スタジオA）と約五〇mの中規模スタジオ（スタジオB）、そしてそれらの間に位置する録音制作スタジオは、千住キャンパスの中心ともいえる施設で、マルチチャンネルステレオ（5・1サラウンドが代表的）などの新しい録音再生手法の研究に用います。計画当初、地下鉄千代田線がキャンパス敷地の地下を走っていることが判明したため、地下鉄からの振動がスタジオ内に伝わらないように、柱や梁の配置やコンクリート壁の厚さなどの建物そのものの仕様から浮き床構造といった音響に関する仕様まで、防音には細心の注意をはらって設計されました。また、従来のホールなどの設計で考慮されている残響時間などの値だけではなく、録音を目的とした部屋としてふさわしい条件を十分検討し、反射音の到来方向や音の密度までを考慮に入れた音響設計を行うことで、非常に優れた音響特性を備えたスタジオが実現しました。録音調整室には、5・1サラウンドのモニタースピーカーシステム、32チャンネルのミキシングコンソール、録音や編集作業を行うデジタルオーディオワークステーション、そのほかさまざまな効果機器などを備えており、これらを駆使することでさまざまな録音手法の研究、作品制作が行われることが期待されます。

またスタジオAでは、一五〇席程度の観客を収容することも可能で、室内楽などのコンサートをはじめ、学生のさまざまな創作活動や研究の発信の場としても活用されることとしよう。

◆音響制作スタジオ

新館一階の音響制作スタジオは、デジタ

ルオーディオワークステーションを中心としたシステムと、プロジェクトによる映像の再生環境も備えており、映像を伴う音楽音響作品の制作を行うことができます。また最先端オーディオのさまざまなフォーマットに対応した視聴室としての機能を備え、講義や作品の視聴会などに用いるほか、国際音響規格にのっとった音響特性を備えていることで、音響心理に関するさまざまな実験にも活用します。

また隣接する音楽演習室をはじめ、第7ホール、スタジオA、B、そして録音調整室といった空間の連絡回線を備えており、これらの部屋を結んだ録音作業や作品制作、さまざまな実験も行うことができます。

◆行動室・観察室

新館二階に位置する行動室・観察室は、おもに音楽療法セッションに用いられます。行動室に隣接した観察室から行動室にいる被験者の様子をマジックミラー越しに観察できるだけでなく、ビデオ映像や各種音源を使った実験なども行えます。

◆第7ホール（ダンス演劇スタジオ）

従来の体育館を改修し、キャットウォーク（天井裏の通路）や、照明、音響の調整機器を備えたコントロールギャラリーを設けることで、さまざまなイベントに対応できる多目的スペースとして生まれ変わりました。音楽と身体表現に関する研究をはじめ、さまざまな活動に用いることが期待されます。

科助教授

（かめかわ・とおる／音楽学部音楽環境創造



録音調整室。録音手法の研究、作品制作がおこなわれる



第7ホール（ダンス演劇スタジオ）



行動室。隣接する観察室とともに音楽療法セッションに用いられる



中庭



音響制作スタジオ。映像を伴う音楽音響作品の制作をおこなうことができる

◆組織の説明

音楽環境創造科…二十一世紀の新たな音楽芸術と、それにふさわしい音楽環境・文化環境の発展と創造に資する人材育成をめざす学科。平成十四年に新設され、現在まで茨城県取手キャンパスにて活動を行ってきた。音楽文化学・音楽を中心とした多様な芸術活動を人間的重要かつ本質的な文化的営為としてとらえ、広い視野と多彩な研究方法によって探求するための専攻として、平成十八年四月に大学院に新設された。七つの研究分野から構成されているが、そのうち音楽音響創造（音楽と音響の知識、技術を身につけた上で、それらを横断する先進的な研究テーマに取り組み）と芸術環境創造（音楽、舞台芸術、映像、メディア表現など、さまざまな芸術表現と社会の結びつきを多角的に研究する）の二つの研究分野は、この四月に新設されたもの。

キャンパス開設記念イベント情報 千住キャンパスを拠点として展開される 活動や事業について

東京芸術大学音楽学部は、足立区の全面的なサポートを受けながら、平成十八年九月からさまざまな芸術文化事業を展開する。千住キャンパスは、その東京芸術大学という機関の教育研究の現場であると同時に、千住の街や足立区に芸術文化を振興するための、いわば大学が社会にむけて積極的に働きかけていくための活動拠点となる。足立区の「文化芸術振興基本条例」に謳われた基本理念に沿うような形で計画される多様な事業は、大別すると芸術文化発信事業、教育福祉事業、区民文化事業、学術事業などに分類することができる。ここでは予定されている事業の中から主だったものを選び、その内容あるいは理念を簡単に紹介する。

(本文中すべて敬称略)

芸術文化発信事業

音楽学部の教育研究成果を広く社会に発信し、質の高い芸術を聴衆に届けていく活動であり、多様な演奏会が用意されている。その第一回目を飾るのが、芸大フィルハーモニーによる演奏会（九月十二日、天空劇場（東京芸術センター）、指揮松尾葉子、サククス・須川展也、ほか）である。その後、芸大チエンバーオーケストラ演奏会（九月十八日、天空劇場、指揮ゲルハルト・ポツセ）、学生オーケストラ演奏

会（十月十五日、奏楽堂、指揮ゲンナジー・ロジエストヴエンスキー）、邦楽カラコンサート（十月二十一日、西新井文化ホール、司会葛西聖司、ほか）と続く。また、松原勝也カルテットと著名なジャズピアノリスト山下洋輔の競演（十月九日、天空劇場）や、歌舞伎役者市川染五郎を迎えての舞台企画（十月二十九日、西新井文化ホール）など、趣向をこらした企画も予定されている。

また、千住キャンパスを教育研究活動の本拠地とする音楽環境創造科にスポットをあてた企画もある。とりわけ今年度には客員教授として来日しているアーティスト、インゴ・ギュンターが千住キャンパスを会場として作品を発表する予定である。

この秋、千住の街がアートの発信地として国内外から注目を集めることとなるだろう。

教育福祉事業

質の高い音楽や芸術を提供する一方で、それに劣らず音楽学部が重視しているのは、子どもからお年寄りまでの区民を対象に、それぞれのレベルで音楽を感じ、音楽を楽しみ、音楽に親しんでもらうための活動である。今年度は、音楽教育研究室が中心となり足立区の小中学校と連携して、音楽の授

業やプラスバンドなどの課外授業において、学校現場のニーズに合わせた指導協力を行うことになっており、これを広い意味におけるアウトリーチ活動の一環と位置づけ、継続的な活動に発展させていくべく計画を立てている。

また、いわゆる福祉の分野でも、高齢者施設や障害者施設にて音楽活動・音楽療法を行ったり、実際に障害児などを千住キャンパスに招いて音楽療法を実践することも予定されている。

これらの活動に加えて、大学の教育リソースを活用したエクステンション・プログラム（いわゆる公開講座）も計画されている。

区民文化事業

芸大のイニシアチプで行う事業ばかりでなく、すでに地元で行われている芸術文化活動に参加することで、区民のイニシアチプで始まった文化事業をさらに充実させるためのお手伝いをすることも忘れてはならない大切な活動である。もともと足立区は音楽がきわめて盛んであり、足立シティオーケストラ、足立区民合唱団、足立ジュニア吹奏楽団などをはじめとするさまざまな団体が活発な芸術文化活動を展開している。このような区民レベルの活動を大切に育てていくことが、芸術文化振興の基本であることを意識しなが

ら、与えられた環境に最適な具体的方策を組み立てつつある。

学術事業

千住キャンパスは学問を究める場所でもある。とはいえそれは、閉鎖的な壁の中で学者中心の共同体が研究をしていれば十分だということではない。東京芸術大学が、音楽、芸術、文化を研究の対象としている以上、その考察は社会の現実、そして音楽家や聴衆の具体的な姿を想定しつつ行わなければならないし、研究の成果は社会に、そして社会に生きる人々（区民）に還元していかなければならない。この意味で、千住キャンパスにおける学術活動の一環として、いくつかの学術シンポジウムの開催が予定されている。文化庁長官・河合隼雄らを迎えた文化政策シンポジウム（十月二十日・二十一日）、千住キャンパスをはじめ、映画音楽に関するシンポジウム、音響をテーマとしたシンポジウムなど、学術分野での充実したイベントも開催される予定である。

※これらの事業については、音楽学部千住キャンパスに設置される「アトリエ・エッセンス」にてお問い合わせください。☎050-5525-7404が問い合わせ窓口となっております。



千住散策

かつては日光街道の宿場町として栄え、現在も下町らしい賑わいをみせる「千住」の町を歩いてみる。

千住キャンパスがある東京都足立区の「千住」は、江戸時代に日光街道の宿場町として発展した。

文禄3年(1594)に最初の千住大橋が架けられた後、慶長2年(1597)には馬継場の指定を受け、徳川三代将軍家光の寛永2年(1625)に、日光街道初宿の指定を受けた。

東海道品川宿、中山道板橋宿、甲州街道内藤新宿と並んで「江戸四宿」のひとつに数えられた千住宿は、水戸道・佐倉道の初宿でもあり、奥州諸大名の参勤交代をはじめとして、日光参詣や商用の旅人はもちろん、江戸から手軽に遊びに来る人々で大いに賑わった。船頭唄「千住節」は、その繁栄の様子を今に伝えている。

また、千住は松尾芭蕉が『奥の細道』に旅立った地としても知られ、千住大橋北詰には「奥の細道 矢立初の碑」がある。

明治以後は、水利を活かした造船や煉瓦産業が栄え、とくに火力発電所の「お化け煙突」は、足

立のシンボリック的存在だった。

現在は北千住駅を中心に、駅ビルや丸井のような新しいゾーンと、古くからの商店街が拮抗しながら繁華な商業地域を形成しているが、その一方で、旧道沿いには「やっちゃ場(青物市場)跡」「本陣跡碑」「横山家住宅」など、歴史を偲ばせるスポットが散在しており、江戸と現代がつねに交錯する、刺激的な下町となっている。



- ① JR、京成、東京メトロが乗り入れる北千住駅
- ② 駅前にある「飲み屋横丁(ときわ通り)」
- ③ 芸術文化発信事業の舞台のひとつである東京芸術センター
- ④ 古い蔵を生かした喫茶店
- ⑤ 「宿場町通り」と名づけられた商店街
- ⑥ かつては紙問屋だった旧家「横山家住宅」
- ⑦ 旧街道の角に建つだんご屋
- ⑧ アトリエとして使われている古民家

